立原正秋全集

第十一卷

立原正秋全集

第十一巻

角川書店

立原正秋全集　第十一巻
昭和五十八年一月十二日初版発行
昭和五十八年一月二十五日再版発行

著　者　立原正秋
発行者　角川春樹
印刷所　新興印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七一一一（大代表）
振替東京三―一九五二〇八　〒一〇二
Printed in Japan 0393-573411-0946(0)
落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集　第十一巻　目次

女の部屋……五
去年の梅……一六三
夏のことぶれ……三一九
往きて還らざる……三五一
橋の上……三九一
山肌……四〇五
野づら……四三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちぎれ雲……四五三
沙魚……四七五
夢のあと……四九三
解題　武田勝彦　五三三

女の部屋

第一章　残りの夏

ホテルのコーヒーハウスは劇場前に面しており、広い部厚いガラス窓から、道路を隔てて二つの劇場が見えた。朝の十時前だというのに、二つの劇場の前にはすでに若い女の子達が入場を待って花やかな服装が並んでいた。

「ビールをくれ」

更級は道路に面した窓ぎわに席をとり、メニューを持ってきたボーイに言った。

まだ春は浅く、劇場前に並んでいる若い女の子達の殆どが冬外套を着ていた。俺が牟礼京子と遊んでいた頃、京子はあの女の子達の年頃だったろうか……。彼は運ばれてきたビールをひとくちのんでから、劇場前に並んでいる女の子達の色とりどりの服装を眺め、心のなかで指をおりながら来し方の歳月を数えてみた。

更級信彦が京子と十六年ぶりに出あったのは前夜であった。十六年前というと、俺が二十五歳、京子が二十二歳のときだ、おたがいに若かった、といまの更級はおもう。

更級が前日ホテルで原稿の仕事を終えたのは夜の九時だった。それから原稿をとりにきた編集者にそれを手渡してから、帰宅しようかもうひとばん泊ろうか、と考え、疲れていたし、これから大磯の自宅に帰るのもかなり億劫だったので、彼は帰宅を明日にのばし、銀座六丁目にある行きつけのバーに出かけた。そのバーに京子が来ていたのであ

る。京子は、友人だといって更級に連れの青年を三人紹介してくれた。青年達はいずれも当世風の服装に髪を短く刈りあげ、スポーツでもやっているような体格をしていた。
更級はその店に一時間ほどいた。そして店をでるとき、京子が、これからもっとのむなら、いっしょに連れて行ってくれ、と言った。
「それはかまわないが……」
更級は三人の青年に遠慮した。
「この坊や達なら帰すわ。あなた方、これで帰ってよ。わたし、久しぶりに昔の友人とあったから、今夜のおつきあいはここでおしまいにしてちょうだい」
京子は青年達を見て言った。
「はい、そうします。車を使っていいですか?」
青年の一人が訊いた。
「車はだめよ。わたしが乗って帰るんだから」
「はい、わかりました」
三人の青年は、よく飼いならされた犬のような感じがした。
店の前の歩道で、三人の青年は二人に別れて行った。
「きみは、あいかわらず遊んでいるんだね」
更級は京子と並んで八丁目の方に向って歩きながら言った。
「性分なのよ。家にじっとしておれない性分なのよ」
京子が答えた。
「すごい金持の御曹子と結婚したときいたが、結婚生活はうまく行っているのかい」
「まあ、うまく行っている方でしょうね。本社が大阪にあるの。週のうち三日は大阪、あとは東京の支社にいる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わ」
「大阪にいる三日間を有効につかっているわけか」
「そういうところよ。……子供が二人いるわ。あなたのところは？」
「やはり二人だ」
「おかしいわね……」
「なにがだ？」
「あんなにまいにち喧嘩ばかりしていた男が小説家になっているなんて。いまでも喧嘩はやっているの？」
「いや、三十歳をすぎてからは、喧嘩はやらなくなった。……僕がいま四十一歳だから、きみは三十八になっているわけだな」
「よくおぼえているのね」
「三十八にしては若いな」
「もう、残り花。あなたはいつ鎌倉から大磯に越したの？」
「もう五年になる。鎌倉には苦いおもいでばかりが多く残っているんでな」
それから更級は八丁目の行きつけのバーに京子をつれて行った。

その年の夏は雨が多く、鎌倉の海水浴場では、脱衣場を経営している者も店を張っている者もみな儲からないと言って空を憾(うら)んでいたが、八月なかばをすぎてからは、好天気が続いた。その八月なかばのある夜のこと、更級が京子と砂丘の廃船から出てきたら、周りに三人の男が立っていた。闇夜で相手の顔は見えなかったが、三人とも海水パンツにアロハシャツを着ているらしかった。
「いいところを見せてもらったよ」
となかの一人が言った。

「そうかい。おたがいさまだろう」
更級は咄嗟に京子をうしろに庇うようにして相手に答えた。これはただでは済みそうもないな、と更級は遠くのあかりを見て思った。彼は、暗いなかで波の音をはっきりきいた。そこは由比ケ浜と材木座の中間で、昼間でも人気のない場所であった。素手で三人にどうやってたちむかうか、と一瞬絶望に似た感情が彼のなかをよぎって行った。
「どうだい、その女を、俺達にまわさないかい」
と相手は言った。
「おまえら、脱衣場で働いている連中か」
「そんなことはどうだっていいだろう」
と別の一人が答えた。
「女をまわせと言っても、俺の一存じゃ、どうにもならんな」
「さけんだって、ここからじゃ、あっちまで声は届かないぜ」
「ひろった女だ。まあ、女に訊いてみな」
言うなり更級は廃船にとびあがった。廃船のなかに櫓が一本あったのをおもいだしたのである。
「野郎、女をおいて逃げるつもりだ」
となかの一人がさけんだとき、更級は櫓をつかんで廃船の向うがわに飛びおりていた。これで、こちらは無傷で相手の三人を殪せると思った。
「野郎、あじなまねをしやがる」
一人が言うなり京子の腕をにぎり、うしろから首をしめた。
「女から手をはなせ」
更級は櫓を上段にかまえて三人に言った。
「よしなよ。おめえ、その腐った棒で俺達三人に勝てるつもりでいるのかい」

京子の首をしめている男が答えた。

このとき、一人の男が、ゆっくりしゃがんだ。こちらに目つぶしをくわせる砂をつかんでいる！　と直感した更級は、櫓をそいつの頭に向けて撃ちおろした。砂をつかんで起ちあがりかけた男は、うッ！　と呻くなりくたくたと倒れてしまった。殺っちまったかな、と一瞬後悔に似た感情が彼の裡を走りぬけて行ったが、殆ど同時に、彼のなかから兇暴なものが噴きあげてきた。

「野郎！　棒をはなさないと女を締め殺すぞ！」

と京子の首をしめている男がさけんだ。

更級はだまってそいつの横に歩いて行った。男は京子を前に楯のようにしてぐるぐるまわった。更級の目的は京子の首をしめている男ではなかった。いま一人の男が更級の背後にぴったりくっついていたのである。彼はいきなり背後をふり向きざま櫓を横に流した。男は臑をはらわれ、ひいッ！　というさけび声とともに倒れた。更級は、倒れた男の背中にもう一度櫓をうちおろした。背中の骨を折った、と感じた。二人の男は呻き声をあげながら動かなかった。

「女から手をはなせ！」

更級は最後の男にたちむかった。

「野郎！　棒を捨てろ」

「おまえが女から手をはなしたら捨てよう」

すると、男は、京子の首をしめたまま後退りした。すでに勝負はきまっていた。もう櫓はなくともよかったが、更級はなかから噴きあげてくる兇暴なものに身をまかせていた。

彼はじりじりと男を追いつめて行った。男との距離は二メートルとなかった。このとき、男がぱッと京子の首から腕をはなすと、一目散に逃げだした。更級は追った。そして、背後から櫓をうちおろした。男は左肩をうたれてふり向いた。ふり向いたところを、更級は櫓を左から右にはらった。男は腹をはらわれてのけ反った。

「どこの者だ！」

更級は櫓で男の股倉を押えて訊いた。
「勘弁してくれ」
と男は両手を空におよがせながら哀願した。脱衣場で働いている連中にちがいなかった。
更級は櫓を捨てると相手の右腕を捩じあげ、上膊を右足で踏んで押え、思いっきり、しかしゆっくりと逆に曲げた。関節がはずれるぽきっという音がした。
「ううッ、やめてくれ！」
男は声をしぼりあげた。
しかし更級はやめなかった。脅迫者にたいして酷い感情になっていたのである。彼は足で相手の睾丸を踏み、ゆっくり潰しにかかった。男が悲鳴をあげて上半身をおこしたところを、更級は右足で相手の顔を蹴りあげた。ここまでやらなくともいいではないか、と彼は一方では考えながら、酷い感情を制することができなかった。うしろをふりかえってみたが、二人の男は倒れたまま動いていなかった。

「あれから、わたし達、どうしたのかしら」
京子がベルモットをのみながら訊いた。
「ひとの声がしたんで、松林のなかに逃げたじゃないか」
更級は、俺はどうしてあのときあんなに酷い感情になっていたのだろう、とおもいかえしながら答えた。
「そうだったわね。……わたし、あのとき、あなたがいきなり船にとびあがったのにはびっくりしたわ」
「逃げると思ったのか」
「あなたが逃げるなどとは思わなかったわ。それより、あなたが、相手の男に、ひろった女だ、と言ったときには、ちょっとばかし悲しかったわ」
「奴等、みんな一か月から二か月の重傷で、ながいこと俺をさがしていたらしかった。しかし、おたがいに顔がわ

かっていない。あの年の冬のはじめだったが、駅前のバーで、その話をしていた男にであった。背中の骨を割られ、寒い日はそこが痛むといっていたから、どうも二番目に殴った相手だったらしい」

「あなた、あのとき、なぜあんなに残酷になったのかしら。わたし、三人の男より、あなたの方が怖かったのよ」

「そうだったろうと思う。俺はあのとき、自分で自分を怖いと感じていたほどだったから。人間というのは、置かれた情況でどうにでも変るのだろうな」

「ここでもっとおのみになる？」

「いや、場所を変えよう」

「六本木にいらっしゃらないこと？　ゴーゴーを踊りに」

「踊りはむかしからだめだ。しかし、十六年ぶりで逢ったのだから、六本木までつきあおう。きみの踊るのを見物するとしよう」

そして二人は八丁目の店をでると、銀座の地下駐車場に降りて行った。

「酒が入っているのに大丈夫かい？」

「大丈夫よ。酔うほどのんでいないんですもの」

京子は、白塗りの大型車の横に歩いて行き、ドアに鍵をさしこんだ。

「なんだ、その車は？」

「サンダーバードよ」

「やくざな車だな。きみは昔から何事によらずやくざなものが好きだったが、車までやくざな型を選ぶとはねえ」

「感心していらっしゃるのね」

「そういうところだ」

更級は車にのりながら答えた。

「あなたはいつもそのように正統派だったわね。わたし、あなたのそんな性格に従いて行けなかったのよ。もし従

いて行っていたら、いま頃は小説家の奥さんになっていたわけね」
車が走りだしたとき京子が言った。
「しかし、きみの性格では、僕とは生活できなかったよ。とにかく、雲と霞を食って生きてきた年が数年も続いたことがあった」
「女との遊びも、三十歳を越してからはやらなくなったの？」
「やらないね」
「いまは？」
「遊ぶ時間がないよ」
「もし時間があったら、またやるかしら」
「やらないだろう。四十歳をこすと、自分の仕事を大切にするようになる」
「あなたは正統派のくせに烈しかったけど、雲と霞を食べて生きていた時分も、やはり烈しかったの？」
「毎日がそうだったな」
「よく神経をすりへらさなかったわね。……あなたと別れたのは、九月の末だったわね。おぼえていらっしゃるかしら……逗子のホテルを」
「もちろん憶えているよ。別れる前に、長谷のレストランの前で派手な喧嘩をしたことがあったな」
「あれは、九月のはじめか八月の末頃よ。わたし、その喧嘩のことはあくる日にきいて知ったけど。なんで喧嘩をしたの？　もう忘れてしまったわ」
「きみは忘れても、僕は憶えているよ。原因はきみだったのだから」
「あら、あの夜の喧嘩、わたしが原因だったの？」
「あれは、たしか、夜中の一時すぎだったな……」
更級は、その九月はじめの夜のことをはっきり憶えていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com